一つの伝記論 (11)

安　達　肆　郎

目　次

序
一
二
三　利用された伝記
四　好事家的伝記
五　文学的伝記
六　歴史的伝記
七
八　自己目的的・自足的伝記 (1)
九　自己目的的・自足的伝記 (2)
十
十一
十二　伝記は本来人間精神からいかにして生れたか（「本来の伝記」の成立）
十三
十四　伝記は人間にとって本来いかなる意味をもつか——
十五
十六　人間にとって「伝記」は本来何なのか——
十七……本号

十七

1

小論における探究の大筋は次の通りである。

小論では、先ず、

1.　「本来の伝記」の実例が存在するか否かを問題とし、主人公に対する「伝記者独得の関心」が、筆者がその伝記を書く原動力となっているか否かを目印として、世に行われている伝記の実例の中から「本来の伝記」の実例を探し出そうとした。（第三章～第七章）

ついで、徒労に終ったその探求の結果に鑑みて、今度は、「自己目的的・自

足的伝記」の実例を探求してそれを見出し（第八章、第九章）、それを分析して、「自己目的的・自足的伝記」の実例は、即ち、「本来の伝記」の実例に他ならぬことを解明した（第十章、第十一章）。

2. 次に、「自己目的的・自足的伝記」の実例を手掛りとして、「伝記に関する基本的問い」の第一、「伝記は本来、人間精神から如何にして（どの様なこころから、どの様にして）生れたか――」を究明した（第十一章、第十二章）。

3. ついで、「自己目的的・自足的伝記」の実例を手掛りとして、「伝記に関する基本的問い」の第二、「伝記は人間にとって本来如何なる意味をもつか――」を究明した（第十四章）。

4. 次に、以上二つの問いへの回答を踏まえて、「伝記に関する基本的問い」の第三、「畢竟、人間にとって『伝記』は本来何なのか――」を究明した（第十六章）。

第三の問いの究明は、第一、第二の問いの究明とは、究明の仕方が異なるので、もう少し立ち入って振り返ることにする。

a. 先ず「問い」自体の性格が異なる。

第一、第二の問いが問うているのは、「本来の伝記」と、それの筆者、読者とのかかわりであるが、第三の問いが問うているのは、「本来の伝記」「各種の伝記」等種々の伝記ではなくて、総じて「伝記」と人間とのかかわりである。

また、第一、第二の問いが伝記に直接かかわる個人（筆者、読者）と伝記との、いわば個々のかかわりを問うているのに対して、第三の問いは、「個々のかかわり」を踏まえて、総じて「人間」と「伝記」とのかかわりを問うている。結局、第三の問いは、総じて「伝記」と総じて「人間」とのかかわり一般を問うている。

そこで小論では、この第三の問いを、総じて「伝記」（「文化としての伝記」）は、他の文化に対して、総じて「人間（精神）」からいかにして、いかなるこころで、いか様にして創られたか（「伝記」の生れ、素性）――（第一の問い

の拡張)、また、総じて「伝記」（「文化としての伝記」）は、どの様な姿で総じて人間世界に実存しているのか（「伝記」の正体）――（第二の問いの拡張）というかたちに変えた。

結局、第三の問いは、「文化として、全体としての伝記」は、いかなる文化であるか――（「伝記」の素性と正体如何？――）というかたちに変えられた。（第十六章１節参照）

b．問題がこの様に、総じて文化としての「伝記」と、総じて「人間」とのかかわり一般まで拡げられると、これを究明するための手掛りは、単に第一、第二の問いの究明によって解明された種々の伝記と個々の人間とのかかわりだけでなく、広く、文化として全体としての「伝記」と総じて「人間（精神）」とのかかわりの実態、簡単にいえば、「文化としての伝記」の実態でなければならぬ。

5. そこで、第三の問いを究明するには、それに先立って、「文化としての伝記」の実態が確認されねばならぬ。

ところが、今日の人々は、所謂「各種の伝記」や「伝記」に似て非なる「物語り風人物史」、「伝記小説」等々が氾濫して「伝記」を覆うために、文化としての「伝記」の実態（あるままの、又ありしがままの姿）をみず、然も、みなくなってから久しいために、「文化としての伝記の実態」を忘れてしまっている。（第十六章１節参照）

それは丁度、曽て壮麗な姿を誇った大寺院が、荒廃してその姿を喪い、戦乱のため、一部を残して多くの伽藍が地中に埋もれ、然も埋もれてから久しいために、人々が大寺院の実態（ありしがままの姿）を忘れ去ったのに似ている。

そこで、先の第三の問いを究明するには、それに先立って、「文化としての伝記」全体の実態を確認するために、いわば、それを発掘せねばならぬ（第十六章２節)。（具体的には、実態を示唆する遺物遺跡が先ず発掘されねばならぬ。）

（然し、「発掘」といえば、既に第一、第二の問いに答えるためにも、発掘がなされねばならなかった。今日の人々は、「本来の伝記」の存在も、無論、その実態も、それと人間とのかかわりも忘れ去っていたからである。小論第三

章〜第九章における探求は、その発掘の作業に他ならぬ。

だから、喩えていえば、小論はその始から、その探究の全体が地中に埋もれた「文化としての伝記」の実態の発掘と正体の復原の作業であったといってもよい。小論全体の探究の道筋及び探究の方法の特徴を具体的に示すには、むしろ、この喩えによるのが適当かも知れない。(1)

6. 「文化としての伝記」全体の実態を示唆する遺物、遺跡が発掘されると、次に第三の問いに答えるために、それを手掛りとして、先ず総じて「文化としての伝記」の人間精神からの生れ（素性）が、実験的手続きによって究明されねばならなかったが、「実験」は、それ自体が、更に手のこんだ「発掘」であった。（第十六章3節〜11節）

ついで、「実験」の結果を手掛りとして、「文化としての伝記」全体の正体（内容、構成、性格の、いわば、生きしがままの姿）が最後に究明、復原されねばならなかった（第十六章12節〜17節）。それによって始めて、「伝記は如何なる文化であるか」が明らかになる（人々に実感されうる様になる）からである。（第十六章12節参照）

2

小論の探究のあとを、上述の様に振り返ってみると、小論の探究は、その対象（探究の対象）からいうと、「文化としての伝記」と人間とのかかわりを、a．種々の伝記（「自己目的的・自足的伝記」「各種の伝記」等）と、直接それにかかわる個々の人々（筆者、読者）との、いわば個々のかかわりから始めて、b．総じて「伝記」（「文化としての伝記」）と総じて「人間」とのかかわり一般に到るまで追究、究明したものといえよう。

その際、小論の探究は、その立場（視点）からいえば、種々の「伝記」に体現された種々の人間関係（主人公と筆者、主人公と読者、筆者と読者）に着目して、これを解明し、その結果（それの哲学的人間学的重要性）に鑑みて、改めて総じて「伝記」と総じて「人間」とのかかわりを省みたもの（内容に即していえば、「伝記」の素性＜「人間精神」からの生れの実情＞と正体＜人間世界における伝記の実存の状況＞を究明したもの）である。

畢竟、小論の立場は哲学的人間学的立場（視点）である。

結局、小論は、「伝記」（「文化の一隅としての伝記」）と「人間」との根源的（精神的）関係に、哲学的人間学的考察の光をあてたもの、即ち文化哲学の一隅に他ならぬ。

以上、小論の探究の道筋、対象及び立場を振り返った。

次に、その「立場（視点）」にもかかわることであるが、私が小論の探究の旅を始めるに当ってもっていた、――「伝記」の性格（重要性）及び「伝記」における人間関係の根源性に関する――一つの予感を附け加えて示そう。

というのは、そうすることによって、小論が最後に「文化としての伝記」の正体（生きしがままの姿）の復原という特異な一章（第十六章12節～17節）をもつことの理由、また、私が特に「伝記」を問題としたことの理由が明らかになると思われるからである。

今日の人々は、「伝記」といえば、各種の思わく（目的、狙い、好み等）を原動力とした伝記――、例えば、文学的狙いによる「文学的伝記」、歴史学的狙いによる「歴史的伝記」、「好み」による「好事家的伝記」、様々の「目的」による様々の「利用された伝記」等々――を思い浮べるが、果して「伝記」は、本来そういうものなのか――。

「伝記」は、人間にとって、それだけのものではなくて、本来は、人間ともっと親密な、もっと大切な直接の緊迫した切実なかかわりをもつものなのではないか――。

「もっと親密な」というのは、「伝記」の主人公は、筆者にとっても読者にとっても、ただ文学的、また、歴史的、好事家的視点から眺められる底の人、或は自分の存在の彼方に仰がれるだけの人ではなくて、況してや、何かの目的に利用されるだけのよそよそしい所謂人物ではなくて、もっと身近にあり、その息づかいが聞え、その喜びも悲しみも悩みもが、膚で感じとれる底の人、つまりは、人々がその生涯に亘る生き方を直接同感し、更にはそのひとを直接共

感しうる底の人なのではないか、そして、「伝記」は、その様な主人公の生き方をひいて主人公そのひとを、人々に直接伝えるもの（「共感」の証し）ではないか、というのである。（第十四章参照）

「もっと大切な直接の緊迫した切実なかかわりをもつ」というのは、「伝記」の主人公は、筆者にとっても読者にとっても、ただ身近にあるだけでなく、例えば、彼の勇気によって励まされ、彼の悩みによって心底から揺り動かされ、彼に自分の悩みを訴え、罪を告白し、叱責され、慰められ、励まされ、救われる底のひとではないか、彼は、自分の人生の支えとも伴侶ともなってくれる底のひとではないか、そして「伝記」は、そういう主人公そのひとを、人々に直接伝えるものではないか、というのである。（第十四章参照）

そういう主人公の生き方、主人公そのひとを、人々に直接伝える様な「伝記」は、今の世の中には見当たらぬ、といわれるかも知れぬ。

私もそれには一面同感である。

今日世に行われているのは、その殆どが前述した、各種の思わくに基づく「各種の伝記」である。それに伝記に似て非なる伝記小説や「物語り風人物史」が氾濫している。今日の読者は、この様な「各種の伝記」や「伝記小説」や「物語り風人物史」の主人公に前述の様な親密な大切な緊迫したかかわりを感得することはないであろう。

然し、今日の人々がそういう親密な、また大切なかかわりをもつ主人公を直接伝える底の伝記に会えぬのは、それが全く存在しないからではなくて、そういう伝記が、人の眼に触れぬ地中に埋もれている為かも知れぬ。そして、地中では、秘かに、新しい「伝記」の芽が育ちつつあるのかも知れぬ。

いろいろの兆候からみて、そう考える方が確かな様に思える。

だとすれば、少なくとも一つの試みとして、地中に埋もれたと思われるそういう「伝記」の発掘を試みてはいかがであろうか——。

徒労に終るかも知れぬ。然し、もし、その一つの実例でも、また、それの断片でも掘り当てたら、それは、「伝記」の本来の姿の発見につながるばかりでなく、また、一般に「伝記」と人間との、今は失なわれた「もっと親密な」「もっと大切な直接の緊迫した切実な」かかわりを取り戻すきっかけとなるの

ではないか――。

とまれ、私の「一つの伝記論」は、先述した、「伝記」と人間とは本来、「もっと親密な」「もっと大切な直接の緊迫した」かかわりをもつのではないかとの予感と、そういうかかわりをもった「伝記」は、今日は地中に埋もれてしまっているのではないかとの推量に基づいて行われた探究の旅であった。

さて、その「探究の旅」を終ったいま、私は、探究の結果明らかになった「本来の伝記」の実例が示唆する「伝記」の正体の性格は、略々予感した通りであったと思っている。前章の後半（第十六章12節～17節）で敢えて「文化としての伝記」の正体の復原を試みたのは、探究の結果明らかになった、親密で、大切で、力強くて緊迫した、しかも微妙な「伝記」の正体（元の生きしがままの姿）は、是非、せめてその一端でもを人々が実感できる様にする必要がある、と思われたからである。

それにしても、私が「伝記」という文化の一隅に、特にこだわったのは、「本来の伝記」における筆者と読者との、また、特には、筆者（読者）と主人公との人間関係が、今日では殆ど喪われた、然し、最も根源的な（全人的で緊密な）ひととひとの親密で大切で微妙なかかわり（人生と人間とに対する人間的信仰）を最もよく体現している、と予感したからである。（第十二章参照）

「本来の伝記」の主人公そのひとに対する筆者の全人をあげての傾倒（人間に対する人間的信仰）ほどに根源的な（根っ子からの即ち全人的で、緊密な）ひととひととのかかわりが他にありえようか――。

（「本来の伝記」は変質変容するが、そこにおける主人公と筆者との人間関係は、何れも元の「傾倒」の変種<variation>と解することができる<第十六章参照>）。

3

従来、種々性格の違った伝記が書かれた。殊に近頃は、各種各様の伝記が書かれ読まれている。

それにつれて、「伝記」について、また「伝記」に関して、種々の研究、論

議がなされる様になってきている。（ここでは、これら「伝記」についての、また伝記に関する研究、論議を一括して「伝記論」とよぶことにする。）

この様に各種各様の伝記が書かれ読まれ、種々の伝記論が行われるのは、「伝記」に関する今日の人々の関心の深さを示すものであろう。

さて、前節でみた様な問題を前述の様な方法で追究した小論は、「一つの伝記論」としては、今日の「伝記論」の中で、どの様な地位を占めるのか、或は、占め得るのか、終りにそれを省みておこう。

さて、従来の「伝記論」、就中「伝記研究」の状況であるが、伝記研究は従来、様々の立場で様々の観点から行われているが、研究対象（研究領域）からいうと、これを次の四分野に大別することができる。（第一章の註18～21参照）

a．国別の伝記の歴史、現状の研究。

b．文学的または歴史（学）的観点からする個々の伝記の研究。

c．「伝記」の諸様相、性格及び「伝記作成法」に関する研究。

d．「伝記」の“nature”についての研究。

数の上で最も多いのは(b)で、(c)(a)がそれにつぎ、最も少ない、というより稀なのは(d)である。

前述した私の「伝記」研究は、この中のどの分野に属するか――。強いていえば(d)であろうが、厳密には、私の研究は「伝記」の“nature”（天性、通有性）の研究ではない。「本来の伝記」及びそれを核心とした「文化としての伝記」に関する研究である。（前節参照）

ここに私が「本来の伝記」という場合、それは固有（特有、独得）の個性をもった、変質、変容以前のもともとの「伝記」というほどの意味である。（第一章の註23～25参照）

してみると、小論は、従来の伝記研究のどの分野にも属さない。

次に、今日の「伝記に関する論議」の状況であるが、――

今日の伝記研究者は各々の立場から伝記に関して種々論議しているが、伝記

研究に直接はかかわらぬ人々の伝記に関する論議のうちにも傾聴に価するものが多い。[2]

私は、それらの「論議」を重視し、特に重要と思われるものは、小論の中でも取りあげたが（第十二章、十三章、十四章、十五章）、これら従来の「論議」は、総じていえば、断片的で表面的である。小論でした様に、「本来の伝記」を核心とした「文化としての伝記」全体について、根本的に、即ち「文化としての伝記」の素性や正体を問い、それに答える底の全般的根本的論議がなされたことはない。

結局、私のこの「一つの伝記論」は、従来の伝記研究のどの分野にも属さず、また、従来の伝記に関する論議とは論議の仕方も内容も異なる。畢竟、小論は、従来の伝記論（研究、論議）のどの分野にも属さない。

この様な状況を何と解すべきか――。それは、何を意味するのであろうか――。

さて、小論（この「一つの伝記論」）は、従来の伝記論の分野には属さぬが、然し、それの内容からいうと、「伝記論」に不可欠の重要な研究、論議をしてきたといえる。というのは、小論の内容は、前述の様に、要するに「文化としての伝記」の本来の姿（「本来の伝記」）と、それの素性、そして正体を究明したものであるが、これは丁度「伝記論」の基礎を究明したものといえるからである。

これを「伝記論の基礎」というのは、「伝記」について人は何を研究するにせよ、論議するにせよ、「文化としての伝記」の本来の姿、素性、正体に関する問い、即ち小論で究明した「伝記」に関する三つの問いへの答えを、常に踏まえていなければならぬ筈だからである。

してみると、前述の様に小論（「一つの伝記論」）が従来の伝記論のどの分野にも属さぬということは、即ち従来の伝記論が、「伝記論」に不可欠なその「基礎づけ」（の分野）を欠いている、ということに他ならぬ。

この様な状況を、このまま放置してよいかどうか――。一体、今日の「伝記

論」者はこの様な状況に気付いているかどうか——。

種々の思わく（目的、狙い、好み等）に基づく所謂「各種の伝記」ばかりが世に溢れ、所謂「伝記」が書きなぐられ読み流され、更には、伝記に似て非なる伝記小説や物語り風人物史等々が伝記の代用に書かれ読まれ（第十五章参照）、また、「常識」が伝記に関して、見当外れの錯覚に陥り（拙稿「これからの伝記論のために」、「大阪経済法科大学創立20周年記念論文集」所収、第一章参照）、そのためか、「伝記」に関する人々の意識や論議の間に、いろいろなかたちのくい違いがみられる（前出『伝記の魅力』参照）様になった状況をみると、今日の伝記論者が、もうこの辺で、伝記論の基礎づけの欠如に気付き、「本来の伝記」の姿を省み、それを核心とした「文化としての伝記」の素性や正体を省みる底の研究、論議がぼつぼつ現われ始めてもよさそうに思えるが、私の知る限りでは、今日まだその様な研究、論議はみられない。結局、こころある少数の人々の指摘や忠告にもかかわらず、伝記論者の間に、「基礎づけ」の欠如が気付かれ、それへの対応が試みられた気配はない。(3)

小論は、前述の様に、本来は、「伝記」に関する三つの問いを解明した文化哲学の一隅であるが、今日の伝記論のこの様な状況との関係からいうと、従来の伝記論の欠陥を補うためになされた「伝記論の基礎づけ」の一つの試みともいえよう。

私は、これからの伝記論（者）の中から、優れた「伝記論の基礎づけ」が生れ出ることを期待している。

もし、小論が、その新しい「伝記論の基礎づけ」の先駆或はそのための捨て石の役目を果しえたら望外の幸せである。(4)

——了——

註

十七

（1） 省みれば、小論は、第十六章の探究ばかりでなく、そもそもの始から「文化としての伝記」の発掘、復原の作業であった。

従来、「伝記」に関して様々の論議がなされて来たが、その際、人々が「伝記」と考えていたのは、われわれの所謂「各種の伝記」である。即ち、筆者の各種の思わく(「目的」「狙い」「好み」等々)を原動力として書かれた伝記である。

畢竟、人々は従来、「各種の伝記」が即ち「伝記」であると思い込み、「各種の伝記」の内容、性格が即ち「伝記」(というもの)の内容、性格であると信じてきたのである。また、「伝記」の素性についても、人々は、「伝記」は各種の文化の領域に属するそれの一ジャンルと解してきた。(拙稿「これからの伝記論のために」、「大阪経済法科大学創立20周年記念論文集」所収、第一章参照。)

小論(「一つの伝記論」)は、「伝記」に関する従来のこの様な通念、通説をそのままは信ずることができず、それらとは違った「伝記」の元の生きしがまま、ありしがままの姿が今日では人々に忘れ去られ、人々の眼の届かぬ地中に埋もれているに違いないと考えた筆者が、そのありしがまま、生きしがままの姿(実態、正体)を発掘、復原するために試みた論考である。

それで、小論全体の構成(探究の道筋)をより的確に示すために、ここで、小論の全体を、人々の眼の届かぬ地中に埋もれた「伝記」という廃寺の発掘と復原の作業に準え、その視点から、小論でなされた探究のあとを振り返ってみよう。

「伝記」という曽ては広大な境内に、壮麗な七堂伽藍が建ち並んでいた大寺院は、今は荒廃し、主な伽藍の殆どが地中に埋もれ、わずかに、境内の周縁にあったいくつかの堂宇を地上に残すのみである。

それに、寺院が埋もれてから久しい。そこで人々は、曽ての大寺院の実態、例えば、それの結構(規模、伽藍の配置等)は勿論、広大な境内が存在したことも、否、そもそもここに大寺院が存在したことさえも忘れ去った。

今日の人々は、もはや、残されたいくつかの堂宇が一緒に所属していた一つの大寺院が存在したとは思わず、これらの堂宇は、もと、各々が別々の寺院の一部として建立されたものとさえ思う様になっている。

ところが、注意してみると、残された堂宇の周囲の土地や、堂宇の中から、人々が思い込んでいるこの堂宇の右述の様な来歴からは理解し難い底の様々の遺跡や遺物が発見される。

そこで、これらの遺跡、遺物等を考え併せると、ここには、現在地上にある凡ての堂宇を含んだ独立した一つの大寺院が存在した筈で、広大なその境内には、現存の堂宇の他にも種々の建物、何よりも、大寺院の中心たる堂宇(金堂)が存在したに違いない、と思われてくる。

この様な発想に基づいて、先ず、廃寺の中心であった筈の金堂(「本来の伝記」)の探求と発掘が行われる。(小論第二章から第九章までの、「主人公に対する伝記者独得の関心」の探求と、「自己目的的・自足的伝記」の実例の探求がそれに当た

る。<第十一章参照>）

ついで、そこに発掘された金堂の遺跡の上に、金堂（「本来の伝記」）の復原が試みられる。（小論第十二章及び第十四章がそれに当たる。）

さて、こうして、この大寺院の金堂（「本来の伝記」）が発掘、復原されてみると、この金堂と現存する堂宇（「各種の伝記」）との関係が改めて問題になってくる。発掘された金堂と現存する小堂宇とは、もと同じ一つの大寺院の建物として建立されたものなのか、それとも、両者は同じ名（「伝記」という名）をもってはいるが、もとは――人々が従来信じていた様に――別々の寺院の建物なのか、つまり、両者の素性（生れ）とその関係が問題になる。両者の「素性」の究明は、荒廃して埋もれた大寺院の元の建立の次第、ひいて、今は忘れ去られた大寺院の構成の実態（ありしがままの姿）を見出す作業であるから、大寺院の発掘の一環である。（小論、第十六章3節～11節がそれに当たる。）

さて、「素性」を発掘してみると、両者（「本来の伝記」と「各種の伝記」）は、ただ同じ名（「伝記」）をもつだけでなく、もと同じ一つの大寺院（同じ文化領域）の一部であり、また、両者を含むこの大寺院（「伝記」という名の文化領域）は、その素性（精神の、他の文化とは違った独得の立場でのはたらきの所産であるという素性）からみて、もと由緒ある独立した大寺院（独立した一つの文化領域）で、金堂（「本来の伝記」）を中心とした広大な境内（領域）には、現存する堂宇（「各種の伝記」）を始め数々の堂宇（様々の「中間的性格の伝記等」）が建ち並んでいたことがわかってくる。（第十六章11節参照）

では、その大寺院（独立した「文化領域としての伝記」）は、どの様な寺院であったのか――。それの正体（生きしがままの姿）が次の問題である。（小論第十六章12節以後は、この「正体」の解明<復原>の試みである。）

先ず、「文化としての伝記」の内容即ち伝記を創るこころの正体が復原されねばならぬ。先の喩えでいえば、様々の伽藍は、それぞれ如何なるこころによって建てられたのであろうか――。

様々の伽藍は、同じ一つの寺院の建物であるから、根源的には、みな創建者の同じこころ（「伝記者独得のこころ」）の所産であるに違いないが、各々の伽藍は、その「同じこころ」(「伝記者独得のこころ」）を、それぞれどの様に体現しているのであろうか――。（「文化としての伝記」の内容）

ついで、「文化としての伝記」の構成が復原されねばならぬ。先の喩えでいえば、この大寺院は、どの様な構成をもっていたか――。（金堂の他に、それはどの様な伽藍<どの様な型の伝記>を、どの様な配置で含んでいたか――）（「文化としての伝記」の構成）。

次に「文化としての伝記」の性格が復原されねばならぬ。喩えでいえば、この大

寺院（「文化としての伝記」）は、いかなる性格の寺院であったか――。具体的にいうと、この大寺院は、当時の人々にとって、どの様な独得の意義をもっていたのか――（この大寺院は、当時の社会で、如何なる独得の存在理由をもっていたのか）（「文化としての伝記」は、人々に対して、どの様な意義をもっていたのか――「文化としての伝記」の性格<独得の意義>）

発掘された大寺院（「文化としての伝記」）のこの様な正体（内容、構成、性格）を明らかにするのは、地中に埋もれた大寺院の遺跡や遺物や素性を探し出すこと、要するに、ありしがままの姿をみつけ出すこと（発掘）ではなくて、わずかに残る断片や、発掘された遺物、遺跡、事実等を手掛りに、曽て建っていた大寺院の発掘された骨組に血を通わせ肉をつけて、それの生きた今日では失なわれた元の姿を象徴的に再現する（喩えによって再現する）ことであるから、大寺院の元の生きた姿の復原に類する。（小論第十六章の後半<12節以後>は「文化としての伝記」の正体の、この様な復原の作業である。）

さて、こうして終に到り得た地点からいま振り返ると、小論は結局、「伝記」という文化の一隅を発掘して、先ず、「伝記者独得のこころ」の所産としての「自己目的的・自足的伝記」（「本来の伝記」）の実例の存在を確認し、更にそれを中心とした「伝記」という独立した文化領域（「伝記者独得のこころ」の支配領域）の存在を確認し（特に、小論第十六章の前半）、その文化領域即ち「文化としての伝記」の正体（内容、構成、性格）を復原したものである。

畢竟、小論は、人間が創った「伝記」という文化の一隅に、哲学的考察の光を当てたもの、即ち「文化哲学」の一隅に他ならぬ。

（2） ここにいう「伝記研究に直接には関わらぬ人々」の伝記に関する論議の実例をあげると、

a．論者が他の種の叙述の途次、「伝記」の筆者（読者）に与えた忠告。（例えば、ケーギ<W. Kaegi>が、その著『ブルクハルトの思考におけるヨーロッパ的視界』の中で、「伝記」の筆者に与えた忠告――小論第十三章参照）

b．論者が自ら書いた個々の伝記の中で、間接に、「伝記」の筆者（読者）に与えた忠告。（例えば、ルナンの『イエス伝』中の言葉。遠藤周作『イエスの生涯』中の言葉。アンドレ・モーロワ『ヴィクトル・ユゴー』伝の序文。高田博厚『ルオー』の序文。<第十三章参照>）

c．個々の「伝記」の解説者が、その特定の伝記に関連して述べた言葉。（例えば、石川淳『諸国畸人伝』の解説者中村幸彦氏の言葉。<小論第四章２節参照>）

（3） 結果論になるが、小論（「一つの伝記論」）は、前掲の様な、こころある人々の、「伝記」に関する様々の論議（伝記研究者の論議及び「伝記研究に直接には関わらぬ人々」の論議）の中、主なものを手掛りとして、「論議」の際に、それらの論

者がその心底に踏まえていた筈の彼の伝記観を、いわば汲みあげ、それを純化し、昇華したものに他ならぬ。

(4) 前出拙稿「これからの伝記論のために」は、従来の「伝記論」及び「伝記に関する今日の常識」の不備を指摘して、「伝記論」の基礎づけの必要性を強調し、また、これからの「伝記論」が、その「基礎づけ」をする際の参考にするために、「基礎づけ」の手順、方法を具体的に考察したものである。